

〔研究論文〕

## 持続可能な「ツーリズム社会」の到来とその行方 —観光社会学の今後の課題と方法—

小坂 勝昭

〔Article〕

### The Coming of Sustainable Tourism Society — Subjects and Methods of Tourism Sociology—

Katsuaki KOSAKA

#### Abstract

The purpose of this article is to investigate the future prospects for our tourism. It is so easy to anticipate the coming of an alternative and sustainable tourism society. In general, a main feature of tourism today has been a group tour. However, these package tours are no longer attractive for our Japanese. Our tourism style is shifting away from mass tourism to individual one. Since the sustainable tourism is emphasized, the ecological and green tourism will be more popular in the tourist industry. So travel agents have to present new styles of tourism for the future.

#### Contents

- (1) The historical review of the pilgrimage tours in Edo period.
- (2) From pilgrimage tours to mass tourism in Medieval England.
- (3) The coming of the post- modern tourism.

#### I. 問題意識

##### —観光人類学と観光社会学の貢献—

最近、観光現象の多様化を反映してのことなのか、「オルタナティブ・ツーリズム」、「持続可能な観光」、「エコ・ツーリズム」等々、新鮮な意味合いをもつ言葉を「観光」社会学の研究書のなかに見かけることが多くなった。今後、「観光」が世界のグローバル化のなかでどのような影響をもつのかに関しても警告が発せられ始めている。地球の環境汚染や温暖化など、深刻な影響を与え続ける人間活動をどう制御しうるのかという問題提起は、地球上の人類すべてに関わるものであるが、南北問題と云われるように先進国の大きな責任の見直しが我々にも大きくなっている。「エコ・ツーリズム」、「グリーン・ツーリズム」の意図は、このような環境危機の時代に出現してきた新たなツーリズムの形態である。

従って、いろいろの問題を抱え始めた今世紀、拡大を続ける「観光客」人口の膨張が観光地の汚染と破壊を惹き起こさないような対策が国際的な観光政策として、取り組まれるべきであろう。観光対策としての世界ポリシーの必要性といえるだろう。世界中のひとびとが観光に何を期待し「移動」を続けるのか、についての正確な分析が必要である。また、観光現象が今後の大変に重要な研究課題となりつつあることもここで断言しておきたいと思う。本稿の目的は、こうした危機的時代を背景に、「持続可能な社会」の実現に貢献しうる「持続可能な観光」のコンセプトを模索することにある。

現在の「観光白書」(国土交通省編)の歴史をたどると、最初の「観光白書」は1963年7月に総理府から刊行されており、この年に海外渡航の自由化がなされている。

いま、最新の平成18年度版の『観光白書』から海外渡航者数の変遷をみておこう。1964年の海外渡航者数は12万8,000人、1980年、390万9,000人、2005年は1千740万人という数字である。<sup>(1)</sup> 更に、山下晋司の文献からみると、世界観光機関(WTO)の数字では、1995年、世界で国境を超えた旅行者数は5億6384万人、年間3990億ドルが旅行のために消費されている。そして、2000年までには、国際観光を行う人は、年間7億5000万人、消費される額は7210億ドルに達する、という。<sup>(2)</sup> 山下晋司は、また同書のなかで次のように述べている。

「従来的人文・社会科学においては、観光はまじめな研究対象とはみなされてこなかった。文化人類学においても観光が研究テーマのひとつとして登場したのはきわめて最近のことで、1974年、メキシコ・シティで開かれたアメリカ人類学会でのシンポジウムにおいてのことである。……むしろ人類学者は観光というテーマを避けてきたふしがある。というのも、人類学者自身が調査地で観光客と同一視されることを嫌い、観光に好意をもっていなかったし、観光は近代的な現象であって伝統文化に関心をよせてきた人類学者にはあまり魅力的なテーマではなかったからだ。」<sup>(3)</sup>

また、山下晋司は、アメリカで活躍するインド出身の文化人類学者アルジュン・アパドゥライの言葉「グローバル・エスノスケープ」に注目し、アパドゥライの言葉が実は今日の観光人類学の発展を物語るといふのだ。再び、山下晋司の言説を引用する。「今日、インドの村人はプーナやマドラスの町に出るだけではなく、ドバイやヒューストンにも行く。スリランカからの難民は南インドのみならずカナダにもいるし、インドシナのモンはロンドンやフィラデルフィアへも流れて行く。この地球上を流動する人々―観光客、移民、難民、亡命者、外国人労働者など―によって織りなされる風景を彼は「グローバル・エスノスケープ」と呼ぶ。<sup>(4)</sup>

観光人類学がアパドゥライによって国家を超える民族誌「マクロ・エスノグラフィ」、及び「国家を超える人々を扱う人類学」としての「トランスナショナル・アンソロポロジ」の出現に結びついた、と解釈できよう。<sup>(5)</sup> マクロ人類学の出現であるともいえよう。しかし他方、社会学は残念ながら「国境を超える人々を扱う社会学」を誕生させることに成功しなかった。社会学にとっての「マクロ社会学」とは単に全体社会を意味するだけであり、ミクロに対するマクロ、という相対概念に過ぎなかった。「新しい文化人類学」に対応する「新しい社会学」の出現が待たれるのである。

1) 平成18年度『観光白書』(2006) 国土交通省編、21頁。

2) 山下晋司(1999)『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会、3頁。

3) 同書、7頁。

4) 山下晋司(1996)『移動の民俗誌』3頁。

5) 同書、5頁。

文化人類学者のB. マリノフスキーが1915-16年、1917-18年の二度にわたって実施した東ニューギニアのトロブリアンド諸島のフィールド調査で実施したのは、その島で生活している人々の結婚制度を始めとする文化や習慣、及び規範への従属などの実態について調査を実施し機能主義人類学の方法論を確立し、その後の文化人類学に大きな影響を与えた。しかし、彼の業績が地球規模のマクロ人類学を成立させることはなかった。

社会学が、観光現象を研究対象とすることに遅れをとったのは、自国の農村、都市、家族、犯罪、ジェンダー、福祉などの分析を優先したからであろう。それに対して、文化人類学の調査対象は一貫して海外のバリ、サモア、南アフリカ、であった。山下晋司の言説からこうした最も基本的な学問姿勢が観光への取り組みに現れていると言うべきであろう。

筆者も観光を学問の対象と考えることにためらいを持っていたひとりである。しかし、ここ10年の間に、J. アーリー (1990、1995、2002)、G. リッター (1998)、安村克己 (2001)、須田寛・徳田耕一・安村克己 (2002)、須藤廣・堀野正人編著 (2004)、須藤廣・遠藤英樹 (2005)、などの社会学者が中心になり観光社会学関係の研究書が出版されている。それ以前の古典的業績をあげればD. マッカネル (1976)、平野秀秋 (1980)、などの文献を指摘できる。こうした観光関係の研究書が次第に増えつつあり、また観光関係の学部や学科を設置する大学が11校を数えるまでになってきた。観光社会学者として著名なランカスター大学のJ. アーリーは次のように語る。

「観光というのは、ほとんどの評論家たちが考えてきた以上に重要な社会的現象なのである。一冊の本を書くにしても、一見すると、こんな下らない主題はないようにみえる。実際、社会学者たちは労働とか政治というもっと重いテーマについて苦心を重ねて説明をしてきたわけで、かえって行楽などというもっと取るに足らない現象の説明をせよと言われると、たいへん困るのではないかと想像されるのである。」<sup>6)</sup>

こうしたJ. アーリーの言説をまつまでもなく、「観光」、「余暇活動」といった人間の行動が実は大変に長い間、時代を超えて繰り返されてきたにもかかわらず、「仕事」、「労働」、「政治」、「教育」といった日々の日常生活を支える社会的機能にかかわる行動に比して軽視されてきたことも事実である。従って、経済先進国イギリスでトーマス・クックにより「団体旅行」が組織され、それが次第に世界へ拡大し、「マス・ツーリズム」時代がもたらされた経緯は観光現象、観光行動の理解にとって不可欠の歴史的事象である。

わが国でも1964年、新幹線開通と東京オリンピック招致により急速な経済成長がもたらされ、観光目的の団体旅行が急増した。また、70年代以降、旅の仕方、観光方法は著しい変化を遂げ、団体旅行から個人旅行へと観光の成熟化が始まる。『地球の歩き方』シリーズの刊行がこうした傾向に拍車をかけることになった。ジャンボ機就航によって、ヨーロッパ、北米への観光旅行者の増加によって、生活実感としての先進国の「豊かさ」を個人レベルで認識し、さらにエンジョイする方向へと変化していった。

今日の観光産業の拡大と隆盛はグローバル化という世界の動きと連動し、一国の文化、思想さえ転換させるような影響力さえ持つようになってきている。旅の仕方、観光方法は時代と共に著しい変化をとげ、観光に伴う種々の要因が一国の下部構造やイデオロギーさえ変化させかねないのである。国民国

<sup>6)</sup> J. Urry, *The Tourist Gaze*, 2002 (2nd. ed.) p.2. 加太宏邦訳『観光のまなざし』法政大学出版会、1996年、3頁。

家としての成熟度と無関係ではないとも言えよう。例えば、東独の観光客の海外渡航の増加によって、自由主義圏の自由、人権、文化について認識が深まり、その結果として社会主義ソビエトの崩壊が惹き起こされたことなどがその好例であろう。

こうした変化は、わが国でも生活のなかの「余暇の過ごし方」に関心が集まり、またレクリエーションの充実が問われるようになる。企業福祉の充実がそうした動きを支えると共に健康管理の大切さを認識し始めた中間層にテニス、スポーツジムの普及が始まり、OLたちの流行にもつながった。こうした動きは、80年代に見られた顕著な特質でもあった。また、学生やOLたちの個人旅行も急速に増え始めた。企業組織の中で働くOLたちの一部には企業の女性に対する人事施策に失望し、「バリ旅行」で別の人生、生き方に目覚め、新たな人生を選ぶ者が現れる。<sup>7)</sup> アメリカの大学院での研究生生活に期待を寄せるOLたちが留学を志したのもこの時期であった。

80年代から90年代にかけて、『地球の歩き方』を携え、ホテルと往復チケットさえ予約すれば海外旅行を楽しむことが可能になった。旅行代理店のH I Sはこうした海外観光の普及に大いに貢献してきた。こうした観光の大衆化は、わが国の経済や文化に影響を与え、観光のあり方にも大きな変化をもたらしてきた。従って、わが国の観光者の行動は先進国の旅行者とさほど変わらないレベルに達した、といってもさほどの外れではないのだ。「生の充実」という目的の実現を目指して、海外旅行から異文化に触れ、自分を客観的に見つめ直し、世間知らずの自己を反省し、さらに一層の研鑽にチャレンジする、こうした傾向は、今後さらに多方面に拡大していく傾向にある。

今後の方向として、団塊世代の行方に注目が集まっている。ゴルフ、登山、ヨガなど、健康増進に役立つスポーツや、巡礼旅行、アジアへの長期移住、スローフードを求めての熟年旅行など、ロハスな生き方を追求する生き方が人気を集め、環境と健康を克服課題と考える各種のNGO、NPOが隆盛を誇る時代がくる可能性がある。ポスト・モダンの目指す方向性の再認識といえよう。先進国に比較して、余暇生活やレクリエーションの観点からは、わが国はまだまだ後進国なのである。フランス、アメリカなど西欧先進国の余暇生活の豊かさが再認識され、日本企業も長期「有給休暇」が取れる勤務体制を採用し、企業の福利厚生の実質が有能な人材確保に寄与する、そうした時代に来ているのである。本論文は、「観光社会学」という比較的新たな研究領域がどのような今日的課題を背負い、どのような研究・分析手法を採用すべきかに焦点を絞って考察を進める。

## II. 観光行動の史的考察 — レビュー —

### (a) わが国の巡礼の旅 — 伊勢参り —

観光(ツーリズム; Tourism)という言葉は観光が産業として拡大化する頃から使用されるようになった言葉であろう。わが国においても、江戸時代には現代の観光に近い形の「旅」が積極的になされていた。「お遍路さん」で知られる「四国八十八ヶ寺まわり」、「関東三十三札所まわり」、「おかげ参り」などが有名である。金森敦子は、『江戸庶民の旅』の中で次のように述べている。

「旅が庶民レベルまで広がったのは、何度となく繰り返されたおかげ参りと、主人や家族に無断で伊勢へ出かける抜け参りが黙認されていたことの影響が大きかった。慶安3年(1650)に始まったお陰参りは、60年ごとに伊勢の神威があらわれると噂されたが、実際には宝永2年(1705)、享保3年

<sup>7)</sup> 山下晋司(1996)、48頁参照。バリ人男性と結婚する日本人女性数は日本領事館によると、1995年現在で200人を超え、在留届けを出していない人を含めると少なくとも300人になるといふ。

(1718)、享保8年(1723)、明和8年(1771)、文政13年(1830)に、爆発的な流行をみている。伊勢へお参りしたら病気が治ったとか、伊勢のお祓いやお礼が降ったのが契機となって思わぬ利益にめぐまれたとか、幸運は口から口へと伝えられ、伊勢参宮をする者が増える。そして、ある日突然、着の身着のままの農民や商家の奉公人の大群衆が、どっと伊勢へと繰り出すのである。」<sup>(8)</sup>

江戸時代、女性の一人旅には危険がつきまっていた。江戸から他国へ出る女性に対する関所での吟味は特に厳しいものであった。しかし、御伊勢参りは特別の計らいがなされたようで、大群衆に紛れて幼い乳飲み子までも連れて行く家族があった。「宝永二年には東は美濃、尾張、信濃、江戸、西は安芸、阿波、のあたりまで広がり、京都方面から120万人、大阪方面から255万人が押しかけた」という。<sup>(9)</sup>このような伊勢参りのためには長旅に必要な金銭を用意することは人々にとって大事業であったが、一生に一度は必ず出かけねばならないという一面も持っており、室町時代から明治時代まで、「伊勢講」、「講中」(こうじゅう)として続いた相互扶助システムとしての「講」が大きな役割を果たした。その方法は、講に入っている大多数の村人が「醸金」(きょきん)をして互いに順番に伊勢に参宮するという制度であった。<sup>(10)</sup>

筆者が以前調査を実施した「隠岐ノ島」は島根県沖の流人の島として有名な「離島」である。隠岐の「焼火神社」(焚火神社)の元宮司松浦康唐が『隠岐島前の文化財』(7号、1970)に寄せた貴重な論考「隠岐島前の伊勢講」には、離島での伊勢参りの実態が記録されており、島民が路銀として使う「講銭」がどうして捻出されていたのかが理解できる大変貴重な資料である。<sup>(11)</sup>松浦によれば、講銭の捻出は島前の「橋村」の場合、四百文を年2回4月と11月に各自が納める方法と、区の共有林を共同で伐採してこれを売却して参宮の諸経費に充てる方法とがあったという。この橋村の場合、一人宛の割当額は四百文、代参人一人当たりの路銀は四貫文、隣村の大津村では一人割り三百四十八文、代参者が路銀十一貫文、という記録が残されているという。<sup>(12)</sup>伊勢までの経路は、明治時代の古老の言い伝えによれば、先ず大山寺に詣り、四十曲峠を超えて山陽道に出た、という。また日程は四月二十日に立立し、帰島したのが六月二十五日、この間65日を要したという。<sup>(13)</sup>こうして、「講」は江戸時代末期の旅籠の協定組織となって発展を遂げ、女性や一人旅でも安心して泊まれる旅籠の講組織ができあがった。特に、浪速講は日本の協定旅館制度の始まりともなっただと言われる。<sup>(14)</sup>更に、興味深いのは、伊勢詣での回数も非常に個人差があり、焼火神社の快栄住職(文化二年没)にいたっては、生涯に16回の伊勢詣でに参宮したという記録がある。幕府もこうした御伊勢参りのため、また参勤交代のために全国の主要な道路を整備し、中山道を始めとする五街道は江戸時代の巡礼=観光道路であったといえる。

## (b) イギリス中世の巡礼から貴族「遊学」への展開

塩田正志によれば、ギリシャ時代には、旅は、①保養を目的とした人々がエーゲ海の島々へ出かけ、②宗教的な動機で多くの人が各地の神殿に参詣し、③体育向上の目的で競技大会の開かれる地へ旅行

<sup>8)</sup> 金森敦子『江戸庶民の旅—旅のかたち・関所と女』平凡社新書、2002、14—15頁。

<sup>9)</sup> 同書、15頁。<sup>10)</sup> 新村出編『広辞苑』岩波書店、第三版、1984、「伊勢講」、「伊勢太々講」参照。

<sup>11)</sup> 松浦康唐「隠岐島前の伊勢講」、『隠岐島前の文化財』7号、1970、後に『離島「隠岐」の社会変動と文化』(小坂勝昭編著)に所収、御茶ノ水書房、2002、197-208頁。

<sup>12)</sup> 同書、203-204頁。

<sup>13)</sup> 同書、203頁。

<sup>14)</sup> 徳久球雄『キーワードで読む観光』第二版、学文社、1999、51頁。

したりしたが、ローマ時代になると、④料理やワインを楽しむ食道楽という形態、も現れたという。しかし、ローマ帝国の崩壊によって治安が乱れ、道路が崩壊し、十字軍による中近東への道が開かれる11世紀ごろまで、「観光の暗黒時代」となる、と指摘している。<sup>(15)</sup>

また、中世の旅は、①用務旅行者、②巡礼者、③放浪者、④武者修行者、の4類計に限られた、とも言われる。<sup>(16)</sup>

15世紀のイギリスでは、まだ巡礼がさかんであった。観光は、わが国の伊勢参りにしても、世界の他の国々においても宗教観光が最も古く、イスラム教徒による「メッカ巡礼」、ユダヤ教、キリスト教の「エルサレム巡礼」、ヒンズー教の「バラナシ(ベナレス)」巡礼など、聖地は観光地として栄えてきた。

ヘンリー六世は、1434年に2,433人という大多数のイギリス人に対して、スペイン北部のサンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼を認めたという。というのは、十二使徒の一人大ヤコブの遺体が発見され、そこに教会が建てられローマ、エルサレムと共にキリスト教徒の巡礼地となったためであった。<sup>(17)</sup>

塩田の整理に従えば、王政復古(1660)以降、チャールズ2世の頃には、かなりの「海外遊学」が行われていた。あの有名な経済学者アダム・スミスも彼の『国富論』において次のように語っている。

「イングランドでは、青少年が学校を出ると、どこの大学へもやらずにすぐに諸外国に旅行させるということが日に日に慣習となりつつある。わが青少年は旅行したために、総じてひじょうに良くなって帰国する。……こんな若さで旅行し、しかも、その人生の貴重な年月を両親や親類の監督や統制のとどかぬ遠方でもっともくだらぬ放蕩にすごしてしまうため、それ以前の教育のお陰でかれの身につけていたはずのあらゆる有用な習慣はくぎづけに固められるどころか、ほとんどまぢがいなく弱められるか、または失われるかしてしまう。人生のこの若い時代に旅行するというばかげきった慣習が従来好評を博しえたのは、諸大学がみずから不信をまねいていたからにほかならない。」<sup>(18)</sup>

このアンビバレントなスミスの言説の真意は何か、に関心を呼び起こされてしまう。青年の海外遊学を評価するどころか、否定的な言辭を投げかけた記述が残された理由は何か。塩田は、この矛盾したスミスの言説の原因を当時のイギリスの文化状況に求めている。即ち、国教会の設立によってイギリス人の聖地巡礼が既になくなってしまったこと、及びオックスフォード、ケンブリッジ大学における歴史、近代語、などのカリキュラムの充実により遊学の魅力が半減したことによる、と説明している。<sup>(19)</sup>

### (c) イギリスにおける近代ツーリズムの成立

#### ―トーマス・クックの「団体旅行の意義」―

今日の「近代観光」の発展は、最初は団体旅行であったことは紛れもない事実である。そして、その最初の団体旅行はトーマス・クックの手配した禁酒運動に参加するツアーであったと言

<sup>15)</sup> 塩田正志『観光学研究Ⅰ』学術選書、1987、19頁。

<sup>16)</sup> 塩田、上掲書、19頁。

<sup>17)</sup> 徳田、上掲書、52頁。

<sup>18)</sup> アダム・スミス/大内兵衛・松川七郎訳『諸国民の富』、pp.1115-1116。

<sup>19)</sup> 塩田、上掲書、21頁。

われる。クックは1826年バプテリスト教会で洗礼を受け、28年には布教師に任命された。しかし、バプテリスト教会が布教活動に熱意を失った結果、クックは家具師の道を選び、家具店を開いた。

当時の労働者は国産の蒸留酒「ジン」を好んだが、中産階級の人々はこれを嫌い、クックも1833年、禁酒誓約書にサインをし、1836年に禁酒協会の支部を結成した。しかし、クックの工場で働く職人達はエールと呼ばれるアルコール分の強いビールを断つことができなかった。労働者は多量のビールを痛飲することが楽しみという習慣をたち切れなかった。というのは、産業革命によって導入された徹底した分業と過酷な長時間労働は、酒に依存する患者を大勢生み出していた。それゆえにクックも家具製造より禁酒運動に精力を注ぎ、禁酒大会参加者を増やす努力に邁進していた。

1841年7月5日の朝、485人（もしくは570人）のメンバーが地方都市レスターに集まり、18キロ離れたラフバラーの禁酒会場を目指した。この禁酒会場への団体旅行が今日のマス・ツーリズムの先駆けとなったと解釈されているが、実はクック研究家の本城靖久教授によれば、歴史上初めての団体旅行は、実はそれよりもさらに10年前の1831年、マンチェスターの日曜学校の先生120人がリバプールまで一人当たり3シリング4ペンスで日帰りしたツアーであったと指摘されている。<sup>(20)</sup>

クックは、交通の要所レスターに居を構えて「団体旅行」を継続的に組織していたが、さらなる交通の要所「リバプール」へと転居し、「リバプール旅行ハンドブック」と題するガイドブックを作成している。そこには、観光地情報や時刻表が挿入され、出発前には事前の調査を必ず二回実施し、その結果彼の名声は全土に知られるようになった。その後、万国博覧会、スコットランド旅行などを企画したが、ロンドンとスコットランドを繋ぐ路線が不十分であったために、クックの会社は経営不振に陥ったという。

それ以降、彼は世界一周旅行を企画し、彼自身も横浜に立ち寄り、日本を美しい国であると礼賛したと伝えられている。1892年に死を迎えるまで、20以上のグループにより、計1000人余りがクック社の手配で世界一周旅行に参加したのであった。このクックの旅行会社は今日の旅行代理店の出発点となったと言っても過言ではないのである。このクックの貢献は今日の「大衆観光」（マス・ツーリズム）の先駆けとなったものであったが、当初は労働者主体の鉄道旅行という性格をもっていたが、次第にエリートと金持ちの旅行へと変化をとげ、イギリス支配の国々への、いわゆる「植民地観光」という性格を帯びていったと考えられる。

### Ⅲ. マス・ツーリズムから「ポスト観光社会」の観光へ

世界のグローバル化を推進してきたマス・ツーリズムの果たした役割は今日でも十分に意味のあるものである。発展途上国の中国、マレーシア、などの旅行者数は日本を上回る。来年10月から投入されるエアバスA380は一度に800名の観光客を運ぶことが可能な巨大なジェット機である。こうした試みが依然として続いている現状を見れば、マス・ツーリズムの限界も次第に明確になろう。現代の観光形態の多様化がそうしたマスから個人観光を含む様々な形態のものへと変貌を遂げつつあり、ポスト・モダンに対応可能な近未来の観光がどのような方向へ進んでいくのか、は重要な課題である。

本節を考察する際、ヒントを与えてくれたのは、『国際交流』89号（2000年）の特集記事「ポスト観光社会への模索」であった。吉見俊哉監修のこの記事は、巻頭対談として、「観光を超える『観光』」、及び「個人旅行の時代、そしてポストツーリズムへ」という二つの対談を掲載し、観光の将来について深く考察するための貴重な「材料」を提供するものであった。

<sup>20)</sup> 本城靖久『トーマス・クックの旅—近代ツーリズムの誕生—』講談社現代新書、1996、8—11頁。

### (a) 近代ツーリズムの誕生と植民地観光の影響

吉見俊哉教授は近代のツーリズムが、「19世紀、とりわけ大英帝国において、労働者階級を含む大衆の遊びの時間を、ブルジョワジーの視点から組織していくプロセスの中で生まれた」<sup>(21)</sup>と言われたが、こうしたマス・ツーリズムは先進国と言われる国々に波及していった。わが国の70-80年代、大挙してパリに出かけて行って、ブランドのバッグを大量に購入する姿が批判を浴び始めたこと、また東南アジアで少女に大金を支払い、結果として地元の文化や人間関係を破壊してしまう、という事態をも惹起してきたことは記憶に新しい。また、山下晋司教授の指摘によれば、植民地観光は、「植民地がなくなってももちろん消えるわけですが、人の移動の植民地主義的構造は残っている」<sup>(22)</sup>と言う。

「日本人は今、年間に1600万人以上が海外へ出て行くわけですが、そのうち約500万人は米国に行くわけです。が、その内実をみると、200万人はハワイ、そして100万人はグアムです。全体としてみると、6割がアジア諸国へ行っている。韓国への日本人旅行者は200万人をこえていますし、中国へ100万人、台湾へ80万人、香港へ70万人・・・、そういうことを見ると、世界中を旅行しているようでいながら、日本人の渡航先はアジア・太平洋という、日本が19世紀の終わりから植民地や戦争などで密接にかかわり、今もかかわっている地域にやはり集中しているわけです。」<sup>(23)</sup>

確かに、こうした傾向はわが国へやってくる海外からの観光客の国別の数字からも顕著な特色があることがわかる。平成18年度の『観光白書』をみれば、平成17年の訪日外国人のトップは韓国の175万人、次が台湾の127万人、三位が中国の65万人となっている。植民地からの里帰りとも言える傾向を示している。さらに、アメリカからの渡航者数は、85万人で、実質は第三位の数字を示している。日本を支配していたアメリカがこの数字を示しているということは、まさに植民地観光が今日においてもいまだ継続されているという解釈が出来るのである。<sup>(24)</sup>

### (b) オールタナティブ観光の将来

オールタナティブ・ツーリズム研究が一般に知られるようになったのは、国際観光研究アカデミー(International Academy for the Study of Tourism)が1989年にポーランドで開催した国際会議であった。しかし、この会議の結論はオールタナティブ・ツーリズムという概念の適用に否定的であった。その理由は概念そのものが曖昧すぎる、という見解であった。そして、これに代わる概念として「持続可能な観光」や、「責任を伴う観光」(responsible tourism)が提起された。<sup>(25)</sup>安村克己教授は、この会議以降、「マス・ツーリズムに代わる新たな観光形態の全体を表す広義の概念」<sup>(26)</sup>として用いられる「オールタナティブ・ツーリズム」は、最近では「持続可能な観光」という表現になりつつある。持続可能な観光とは個別科学の相互協力によって成立するものであり、こうした方向性が科学的に模索されるとすれば、「鯨を見に行く」、「イルカに触れる」体験観光のことはどのように考えるべきか。こうしたエコ・ツアーも持続可能な観光なのであろうか。それでは、中国へ渡り、植林NPOの団体と共に植林活動を実践するといったグリーン・ツアー活動はどう評価するべきであらう

21) 『国際交流』4-5頁。

22) 『国際交流』6頁。23) 『国際交流』6頁。

24) 平成18年度『観光白書』35頁参照。

25) 安村克己(2001)『観光』、21頁。

26) 同書、22頁。



か。自然保護活動のみがエコ・ツーリズムあるいはグリーン・ツーリズムと呼びうる資格を有するものなのか。酸性雨のためにいまや中国にある高山の松、瀬戸内海や日本海側の島々も例外なく「松枯れ現象」が生じている。「持続可能な観光」とはエコ・ツーリズムの事ではないだろう。というのは、山歩き観光（トレッキング）は自然の植生を破壊することもあり、自然に触れる喜びを観光と考えてしまう一方的な人間の行動でしかない。

今後の課題は、「持続可能な観光」と国際的な「移動の時代」をいかに調停できるか、というテーマであると思っている。

観光社会学の方法と課題を見つけようと、種々の文献を渉猟してきた。もちろん、読むべき文献もいまだ多い。古来から人間は移動し続けてきたわけで、こうした移動が今後ますます増加し、日常生活から脱出し、また戻る、といった「トランス・ナショナル」な移動こそ観光である、ということになれば観光は日常生活の中に埋めこまれることになる。そして、地球の環境悪化が進展すれば、一国に滞在するという観念も喪失することになるだろう。

### (c) 「持続可能な観光」試論

#### —むすびにかえて—

「マス・ツーリズムの終焉」が何を意味するのか、について若干の私見を述べたい。マス・ツーリズムの弊害は、先ず第一に、ジャンボに乗っての大量輸送が結果する環境破壊であり、来年投入されるエア・バス新型機の800人輸送には批判が集まる可能性が大きい。船旅に帰れ、という提案が困難であるとすれば、中型機による輸送を再考すべきであり、ボーイングの中型機路線が今後の方向性を示唆していると考えられよう。

第二の問題は、一時期に大量の観光客（ゲスト）が一つの観光地に押し寄せることによる観光地の疲弊と文化破壊を指摘できる。受け入れるホスト側の態勢が、ゲストに迎合するあまりに起きる問題である。経済的利益を優先せざるを得ない観光地では、ゲストが楽しめる環境を準備せざるを得ないため「擬似環境」を用意することになる。例えば、観光客向けの儀礼や式典、踊りなどを一日中繰り返して上演しなければならない。ここで、「真正性」(Authenticity)問題が出てくるのだ。他方、訪問する側のツーリスト達は、人工的な擬似的見世物では決して満足しない。個人旅行で地図を片手に現地の日常生活や、風土、文化、食、現地の言葉などの体験によって擬似環境ではなく、ホンモノの環境に触れ、満足を与えられる。個人旅行への願望は、こうした実体験が根底にある。

しかし、83年開設の東京ディズニーランドのような徹底した擬似環境、「擬似イベント」(ブーアスティン)に大勢の家族や恋人達が訪れることをどう評価するのだろうか。その虚構性は閉鎖的空間であり、擬似パスポートで入場し外国に旅行する感覚で遊ぶ日本人の現実逃避と、非日常的空間に遊ぶ感覚は海外旅行そのものである。例えば、アジアからのツアー客にとってはディズニーに遊ぶことは大変に人気のある旅行の一つである。この一種独特の遊びの空間としての魅力を持つディズニーは、一度訪れた子供達をディズニーキャラクターの虜と化してしまう魅力を持っている。ちょうど子供達がマックファンになってしまうように一生そうしたキャラクターを生活の一部にしてしまう。こうした遊びの空間はディズニー帝国の支配であると恐れられていることも事実であり、こうした擬似空間の果たす役割についての考察も重要な課題である。

また、最近のエコ・ツアーへの関心は、地球環境の維持と自分の健康に配慮する「ロハス」(Life styles of Health and Sustainability)な生き方の提唱に関心をもつひとびとが増えていくと考えられる。例えば、ロハス・ピーブルのための雑誌『ソトコト』では、環境教育の一貫としてドイツの園庭ビオ

トープ視察ツアー、ロハスの聖地と呼ばれるボールダーの真髄を探るためのツアー、等々の新たなツアー企画が紹介されており、今後もこうしたロハス・ツアーが人気を呼ぶことは間違いのないと思われる。

## 参考文献

- (1) 足羽洋保編著(1996)『新・観光学概論』ミネルヴァ書房。
- (2) Boorstin,D.J.(1962)The Image;or,What happened to Mass Tourism,Atheneum.星野郁美・後藤和彦訳(1964)『幻影の時代―マスコミが製造する事実』東京創元社。
- (3) Cohen,E.(1974) " Who is a Tourist?: A Conceptual Clarification,"Sociological Review,Vol.22,NO.4,pp.527-552.
- (4) 遠藤 英樹・堀野正人・編著(2004)『観光のまなざしの転回―越境する観光学』春風社。
- (5) 古川彰・松田素二編(2003)『観光と環境の社会学』新曜社。
- (6) 橋本和也(1994)『観光人類学の戦略』世界思想社。
- (7) Giddens,A(1990)The Consequences of Modernity.松尾精文・小幡正敏訳(1993)『近代とはいかなる時代か?』而立書房。
- (8) 平野秀秋(1980)『移動人間論』紀伊国屋書店。
- (9) ホイジンガ・高橋英夫訳(1973)『ホモ・ルーデンス』中公文庫。
- (10) Hunphrey,C.R.and F.R.Buttel(1982)Environment,Energy,and Society,Wadsworth.満田久義他訳(1991)『環境・エネルギー・社会―環境社会学を求めて』ミネルヴァ書房。
- (11) 伊藤秀三(2002)『ガラパゴス諸島―世界遺産、エコツーリズム、エルニーニョ』角川選書。
- (12) 国際交流基金(2000)『国際交流 第9号』第一法規出版。
- (13) 国土交通省(2006)『観光白書』。
- (14) 小坂勝昭編著(1999)『離島隠岐の社会変動と文化』ミネルヴァ書房。
- (15) 小林天心(1999)『観光の時代』トラベルジャーナル。
- (16) Leed,E.J.(1991)The Mind of the Traveler,Basic Books.伊藤誓訳(1993)『旅行の思想史』法政大学出版局。
- (17) MacCannell,D.(1973).Staged Authenticity:Arrangements of Social Space in Tourist Settings.American J. of Sociology,79(3),pp.589-603. D.マッカネル・遠藤英樹訳(2001)「演出されたオーセンティティ―観光状況における社会空間の編成-」『奈良県立商科大学研究季報』第11巻第3号、93-107頁。
- (18) Mannheim,K.(1936)Ideology and Utopia:Introduction to the Sociology of Knowledge,Routledge & Kegan Paul.徳永恂訳「イデオロギーとユートピア」高橋徹編(1979)『世界の名著68マンハイム・オルテガ』中央公論社。
- (19) 中瀬昭(1992)『ジャンボが飛んだ日』ハート。
- (20) 中瀬昭(2003)『観光産業論の試み』南窓社。
- (21) 西岡久雄編著(1996)『観光と地域開発』内外出版。
- (22) 西川長夫(1992)『国境の超え方』筑摩書房。
- (23) 前田勇(2003)『21世紀の観光学』学文社。
- (24) 小方昌勝(2000)『国際観光とエコツーリズム』文理閣。
- (25) 澤田秀雄(1995)『旅行ビジネスという名の冒険』ダイヤモンド社。

- (26) 塩田正志(1987)『観光学研究Ⅰ』(第三版)学術選書。
- (27) 白旗洋三郎(1996)『旅行ノススメ』中公新書。
- (28) 篠原重則著(2000)『観光開発と山村振興の課題』古今書院。
- (29) Ritzer,G.(1998)The McDonaldization Thesis,SAGE Pub.
- (30) Smith,V.L.ed(1977)Hosts and Guests:The Anthropology of Tourism,U.of Pennsylvania Press.
- (31) 須田寛・徳田耕一・安村克己(2002)『新・産業観光論』すばる舎。
- (32) 須藤廣・遠藤英樹(2005)『観光社会学—ツーリズム研究の冒険的試み』明石書店。
- (33) 徳久球雄(2002)『キーワードで読む観光』(第二版)学文社。
- (34) 富田昭次(2003)『ホテルと日本近代』青弓社。
- (35) Urry,J.(1990)The Tourist Gaze,2nd.ed.加太宏邦訳(1995)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局。
- (36) Urry,J.(1995)Consuming Places,Routledge.
- (37) ヴェブレン・小原敬士訳(1961)『有閑階級の理論』岩波文庫。
- (38) William,A.M.and Balaz,V.(2000)Tourism in Transition – Economic Change of Central Europea,I.B.Tauris Pub.
- (39) William,A.M.(2003)The End of Mass Tourism,『総合観光研究 第2号』(Japanese Journal of Tourism Studies,No.2.Nov.)
- (40) 山上徹・堀野正人(2003)『現代観光へのアプローチ』白桃書房。
- (41) 山下晋司(1996)『観光人類学』新曜社。
- (42) 山下晋司・編集(1996)『移動の民族誌』(岩波講座・文化人類学)
- (43) 山下晋司(1999)『バリ観光人類学のレッスン』東京大学出版会。
- (44) 安村克己(2001)『観光—新時代をつくる社会現象』学文社。